論 文 要 旨

【論文題目】

日本統治時代の台湾の話し方教育の教授法の変遷に関する研究

－大正期・昭和期を中心に－

【要約】

序章

台湾は日清戦争の講和条約である下関条約締結に伴い、1895（明28）年から1945（昭20）年まで日本の植民地統治下にあった。日本語教育は統治初期から行われ、主要な教育機関は1898（明31）年に設置された公学校という初等教育機関であった。先行研究は、50年間の教育政策の変遷を系統的に整理したものや、読本等の教材分析、特定の教授法を対象としたものが多い。

本論では、公学校の日本語教育の「話し方教育」を中心とした教授法の変遷及び大正期に考案された「構成式話し方教授法」の変遷、そして、内地の国語教育との関係について考察する。

第1章　話し方教育の基盤整備期

ここでは、大きく分けて三つの教授法を考察した。まず、統治開始後まもない時期に伊沢修二を中心として導入された対訳法であり、漢字や漢文の筆談を介した対訳法と、台湾語を介した対訳法の二つが行われた。前者は、台北市郊外の芝山巌学堂で漢字や漢文の素養がある年長者に対して行われ、後者は1896（明29）年に国語伝習所が設置されて以降行われた。対訳法の功績は、導入や定着の確認、会話練習という目的別に設定された「問答」、掛図を利用した教授、実物教授であった。一方、内地からやってきた講習員に速成式に学ばせた台湾語は、対訳法の教授用語として使いこなすレベルにまで達していなかったため、しだいに新しい教授法が求められた。

次に考察したのが、1898（明31）年に設置された公学校で導入されたグアン式教授法（以下「グアン法」と略す）であった。「グアン法」は、幼児の母語習得に着目した教授法であり、時間的順序に従って連続した動作を見せることで、学習者に概念を直観させ、音声と結びつけようとした。「グアン法」の功績は、対訳法時代からの「問答」を多用す

と一致しており、特に自由教育を主張した千葉師範附属小へは公学校教師も参観に訪れており、内地の教育思潮から「構成式」が何らかの影響を受けた可能性は否定できない。

更に、大正期の内地では「話し方教育」に関する研究が高まり、「話し方」は標準語の習得だけでなく「綴り方」の基礎として重視する動きが出てきた。当時の内地で試みられた「話し方教育」の教授行程は、「構成式」と同様に「予備→思想整理→発表と批評→総批（整理）」となっていた。「話し方教育」の研究が数多く掲載されていた教育雑誌『国語教育』には、台湾の公学校教師からの寄稿があると共に、「構成式」を研究開発した台北師範学校附属公学校教師の回顧録には、内地の「話し方教育」の研究関連書籍があったことが述べられていることから、この内地の「話し方教育」の研究も「構成式」に影響を与えた可能性が考えられる。

第３章　新たな話し方教育の模索期

ここでは、昭和期に入り「構成式」が指摘されるようになった問題点や、それに対しての改善策や新たな試みについて考察した。

「構成式」は画期的な教授法として歓迎され、全島に拡大していった。しかし、「構成式」を研究開発した台北師範学校附属公学校は、当時の台湾教育界の総本山的地位にあり、附属公学校の児童も他の公学校の児童と異なり、選抜されて入学した児童であった。つまり、エリート校の児童に効果があった教授法が、必ずしも一般的な公学校の児童に効果が同様にあがった訳ではなかったのである。

大正期に入り、公学校の児童数は増加していったため、一学級あたりの児童の数は60人～70人という状態であった。このような大人数の学級で、「構成式」は時間配分が難しく、「発表内容の構成」に時間がかかり過ぎてしまったり、教師のコントロールがうまくいかず、「批評」が単なる粗探しになってしまうといった問題が指摘されるようになった。更に、公学校の児童数は増えたが、台湾全島の国語解者も順調に増えた訳ではなく、多くの公学校の児童は学校は「国語 」、 日常生活は「台湾語」という二言語併用生活であった。そのため、自発的な動機づけが難しく、欠席や遅刻の児童も多く継続的な学習が難しかった。

そこで、低学年児童に対する指導の研究が高まり、「ごっこ遊び」やカード遊びといった「遊戯」を取り入れた「遊戯の学習化」が積極的に行われるようになった。「遊戯」の形式にすることで、児童の学習意欲が喚起されると共に、遊びながら学んだ語句や表現の

「国民科国語」による「話し方教育」は十分に行われていたとは言い難かった。

このように、日本統治時代の台湾の話し方教育の教授法の「変遷を見ていくと、「問答」「直観教授」「段階教授」といった今日の日本語教育でも行われている方法が行われていることが分かった。また、内地の教育思潮や国語教育から影響を受けていた可能性も否定できないことも分かった。

今後は、「聴き方」や「読み方」「綴り方」といった国語科の他の分科についても現存資料から考察していきたいと考えている。